HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	B：シンポジウムⅠ「生きづらさ」を超える学び ： 総合相談事業の実践から
Author(s)	朝比奈, ミカ
Citation	シンポジウム報告書 ： 子ども発達臨床研究センター総合研究企画, 2012, 28-34
Issue Date	2013-03-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52435
Type	conference paper
File Information	RCCCD_Symposium2012_04.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

B：シンポジウムⅠ

テーマ「生きづらさ」を超える学び

～教育と福祉が出会うとき

「生きづらさ」を超える学び
〜総合相談事業の実践から〜

講演者：朝比奈ミカ
（中核地域生活支援センター　がじゅまる　センター長）

相談の枠を設けずに何でも受け入れる窓口

千葉から参りました朝比奈と申します。お手元の資料の14ページ以降で、私のスライドが配布されていますが、いただいているお時間30分でこのスライドはボリュームが多すぎますので、前半分の中核センターとはというところは自己紹介代わりに使わせていただきたいと思います。

「中核地域生活支援センター」とは耳慣れない名称だと思いますが、一言で言うと「どんな方のどんなご相談でもお受けする」という千葉県独自の相談事業です。2004年、堂本暁子さんが千葉県知事だった時代に、健康福祉千葉方式という取り組みが、県内に一種のムーブメントのような形で広がりまして、対象を限定しない、取り上げる生活課題も限らない、「たらい回しにしない窓口が欲しい」という県民の声を受けてつくられたのが中核地域生活支援センターです。

お手元のスライドでいいますと14ページの左下、最大の特徴が「対象者や問題を問わない」ということで、その隣に千葉県の地図がありますが、県内13カ所に設置されております。事業規模は2,000万円から2,500万円ぐらいですから、せいぜい職員が4〜5人というところです。例えば私が担当しております地域は人口60万人になります。人口60万人に対し職員4〜5人で動いておりますので、言ってみればそんなことができるわけがないですね。私たちを含め13カ所のセンター職員、民間の法人が公募によって県から選定されて委託を受けております。地域の中に、いわば「放り出された」状態の中で、何をどうすれば良いのかと考えた結果、これからご報告いたしますような実践にたどり着いたというのが実情だとご理解ください。

右側のところに若干数字をご紹介しております。24時間、365日というのは、夜間帯泊まり対応ができているセンターは2つぐらいしかないので、それ以外は業務用の携帯に転送されて、それを持ち歩いているというような形になりますが、夜間それから休日の時間帯もある程度の対応を保障する必要があるという状況などが、この数字で見て取っていただけるかと思います。それから、「同行支援」とか「訪問」とか「アウトリーチ」とか、いろいろな言い方がされておりますけれども、要は「事務所の中にこもっていない」、「外に出ていく」というスタイルでの相談や支援が全体の26%ぐらいを占めております。

年齢の状況で申しますと、いわゆる稼働年齢層のご相談が最も多い。都市部だとこの数字がもっと大きくなります。『がじゅまる』では小学校高学年ぐらいの年齢から65歳の手前まで、このご相談で9割ぐらいを占めております。それから障害の方で言いますと、スライドの9の「相談者の障害の状況」というところです。窓口におみえになった段階で何らかの障害者手帳を持っていたり、自立支援医療の対象になっていたりという方が、全体の半数ちょっとという形になります。

私たちの相談の過程で生活問題の背景に障害や病気を疑い、しかも障害福祉のサービスを使っていただいた方が生活が安定すると思われる場合に障害者手帳等の申請をすすめていますが、その割合は全県で12%となっています。『がじゅまる』ですと、これ

が20%近い数字になっております。いわゆる障害グレーゾーンの方々からのご相談が非常に多くなっているという状況です。

特徴的な相談の状況というのは見ていただいて分かる通りです。いろいろな事柄がさまざまに混ざり合っているということで、16ページでは「特徴的な相談活動の手法」というところをまとめております。まずご本人と出会うきっかけはほとんどが関係機関からのご紹介です。その関係機関というのがどこかといえば、1つには市町村の役所ですね。市町村の各課から相談が入ってきます。

それからもう1つが学校。「子どもさんたちには何とか頑張って僕らが付き合いますので、ご家族の支援に入ってほしい」というオーダーが多い。それから、つくづく私たちも15歳を過ぎた方と出会うと、学校というのがいかに重要な社会資源かということを痛感するのですが、学校から切れそうになっている子どもさんですね。こういった子どもについて先生がその後のフォローの要請をされてくる。児相(児童相談所)、家児相(家庭児童相談室)あたりからも似たような連携の要請をいただきます。

それからもう1つが医療機関です。診察を受けに、治療を受けに病院に来たれども、治療環境の立て直しをする必要がある方とか、ご本人から状況を聞いているだけではなかなか治療関係が成立しない、それから身寄りのない方、そういう方について私たちに連携の要請が来るということがあります。ですから私たちはまず「その方がどういう方であって、その方の生活に何が起きているか」というところを知るところから始まる。ここに「理解する」と書いてありますけれども、これはどこまで行っても「理解した」というふうにはなかなかならなくて、「一生懸命理解しようと努力する」というところがせいぜいかと思います。

まずは当人ととことん付き合うところから

中核センターというのは制度の中でも後発の事業ですから、特に私が働く人口46万人の市川市や人口16万人のディズニーランドがある浦安市などは、比較的、リソースが整っている地域で、「何でも相談すると言ってもそんなことができるんですか」とか、「何をしてくださるところですか」といった冷ややかな反応がわりと多かったんですね。そのときに私たちとしても頑張ろうと思いましたが、市役所から「クレーマー扱い」されてしまっている方々、どこに行ってもまともな対応をされない、そういう方々について「とにかく付き合う」というところから始めたということがありました。

ある方は睡眠障害が高じて道端でも突然寝てしまうことがあり、一番ひどかったときには1カ月に何回も救急車の要請をする。ご本人が呼ぶんじゃなくて、道端で倒れるので通行人の方が呼ぶんですね。ですから救急隊も駆け付けて。ですが病院に運ぶ途中でご本人が目を覚ますとか、救急車に乗せる段階でご本人が目を覚まし、病院に行くまでには至りませんが救急車も人手を取られるということもあって、「このままでいいのか」という話にもなりました。

この方は生活保護を受けていたんですけれども、いろいろなことで市役所とぶつかっていまして、「異議申し立てをしたい」というようなお話にもなり、行政手続き上の異議申し立ての書類を作成するところから関係づくりが始まりました。この方については、お家を訪問したら生活は成り立っていなくて、ほとんどモノで埋め尽くされたスペースの中で引きこもる生活をしていると。ですからヘルパーさんを入れるなどの提案をしながらかかわりを作っていきましたが、1つだけご本人がご自分でなさっていることがあって、それは「洗濯物を干す」ということだったんですね。30代の男性だったんですがお買い物もできなくて、私たちに「一緒に付き添ってほしい」という要請があって一緒に買い物に行く。お掃除は「ヘルパーさんに頼みたい。でもお洗濯だけは自分でやる」とおっしゃったんです。

「それはなぜですか？」と聞いたら、大家さんが隣に住んでいらして、アパートは3階建てで、大家さんの奥さんという方が非常に気にして声をかけ、見に来てくれると。大家さんの奥さんも高齢になられているので、3階まで上ってきてもらうのは申し訳ない。「僕がここに洗濯物をきちんと干しておけば、『ああ、今日も起きて洗濯をしたんだな』ということがその奥さんに分かってもらえる。だから僕は自分で洗濯をして干さなきゃいけないんだ」とおっ

しゃったんです。

私はそのお話を聞いたときに、この方は役所で「クレーマー扱い」されて、確かにちょっと理屈っぽい方だったのですが、大家さんの奥さんとそういうお付き合いができる方なんだと思いました。そういうところからその方とのかかわりや理解が始まっていったのかなと思います。ご本人から周りがどういうふうに見えているのかというところが、私たちがその人たちを知るうえで重要なポイントになっている気がいたします。

そういう意味では私たちの窓口に結びついて来る方は、知的な能力は一定程度ある、もしくはとても高い。ですけれども、何でそんな判断をしてしまうんだろうというような判断が積み重なっていった結果、生活困難が増幅していったり、それからいろいろなアクシデントが積み重なっていった結果、狭量な判断をせざるを得ない状況が起きていったりというようなこともたくさん目にしてきました。

これは市川市が作った、自殺対策計画の中の図で、私もこれを見て非常に分かりやすいなというふうに思って、職員の研修などで使っているものです。一番左側のところは視野がある程度広く保たれているという状況の中で、問題解決がしやすい状態を表していて、右側に行けば行くほど視野狭窄（きょうさく）を起こしていく。その加速させる因子というのが上に書かれているもので、下に書かれているものが減速させる因子ということなんです。（スライド16）

物事の背景を見つめ 今に至るプロセスを知る

その図を見たときに、１つのご家庭を思い出しました。母子家庭です。最初に出会ったときは、お母さんと、中学生のお姉ちゃんと小学生の妹の２人姉妹がいました。この小学生の妹の、小児科の主治医の先生が、「がじゅまるに相談に行きなさい」と言って、お母さんが突然電話もなしに事務所におみえになって、本当になだれ込むように事務所の面接椅子に座ってお話をされたというところからその方の出会いが始まりました。

このおうちはもともと４人家族だったんですね。お父さんとお母さんと子どもさんたち２人。自営業でお母さんも家業を手伝っていました。お父さんが突然、交通事故に遭って亡くなられたんです。自分が運転している車で、助手席に上のお姉ちゃんを乗せていて、お父さんは即死の状態だったそうです。お姉ちゃんは無傷で助け出されましたが、PTSD（心的外傷ストレス障害）の診断が付いて、しばらくは入院を余儀なくされた状況だったと伺いました。

お父さんは事務所をやって人も雇っていたものですから、亡くなる悲しみに浸る間もなくお母さんは、事業の整理とかもろもろに追われたんですね。そのとき、お父さんのご実家がいろいろ助けてくださったのですが、そのご実家のお父さんが、ご病気であっけなく亡くなられてしまった。ということで、ばたばたっと大黒柱の人たちが亡くなられた。そうするとその後に残されたお母さんと子どもたち２人は、まず上のお姉ちゃんがPTSDで退院した後も悪夢にさいなまれて夜中に叫び声をあげては起きるというようなことが続いて、お母さんは必死でそのお姉ちゃんを抱きしめるように守って、傷を癒やすということに心を砕いていた。

学校の先生方も心配をして、交代交代でおうちの方に来てくださった。そういうもろもろの支えがあって数年が経過して、ようやく上のお姉ちゃんがちょっとずつ学校に行けるようになってきて、お母さんは一安心と思ったそうです。その間の時期には当時まだ学校に上がる前の下の妹さんについて、「何も言わずに黙って冷蔵庫から自分の食事を出して食べる」というような場面をお母さんは思い出すそうですが、そして下の妹もそろそろ学校に行くようになって、上のお姉ちゃんも一安心と思っていたら、下の妹のおねしょが始まって、「学校に行きたくない」と。小児科の先生のところに連れて行って相談をしたら、「発達のバランスが悪いですね」というようなことを言われたと。お母さんはその時点で大変混乱をされて、そうは言いながらも２人の子どもさんとお付き合いをしていたと。

そんな状況の中で、今度、お母さんの身体に異変が起きて、体中に激痛が走るという状況なんですね。受診をしていろいろ調べてもなかなか原因がわからない。「がじゅまる」におみえになったときには目がもう半分ぐらいしか開いていない状況、まさにこの

視野狭窄（きょうさく）の状態だったんです。人間というのはたくさんのストレスがかかるとそんな状態に陥るんだなということを、私たちに教えてくださったというような感じです。

このご家庭と今でもお付き合いが続いていますが、私たちが何をやったかと言ったら生活支援でした。ものがよく見えないので、「おうちの中を片付ける」という具体的なことから始まりました。下のお子さんはパニックになるとものを投げて壊していたので、電化製品も壊れていたりしたんですね。冷蔵庫や電気のスイッチも壊れていたので、私たちが親しくしていた近所の電気屋さんにせっせと通ってもらって、いろいろなことを直していただきました。そんなことをちょっとずつ、ちょっとずつやっていって。下の妹さんが情緒の学級に通級のような形で行っているんですけれども、その通級のお手伝いをする、サポートをするというところだけまだかかわりは残っています。状況がまたいろいろ混み合ってくると、お母さんからSOSが入りますが、それがなければお母さんはお友達関係も維持されていますし、日常生活を送っていらっしゃいます。

本人がかかわる地域まで理解するということ

何をどう理解するかというときに、私たちのようなセンターは、「起こってしまったときに出会う」ということがありますから、そのひどい状況だけをとらえてご本人を理解しようとすると、なかなか理解をしたことにならないんじゃないのかなと思います。どんな生活を送っていらっしゃった方なのか、その結果、今がどうであるか。付き合いが深まっていけばいくほど、その中でどういうふうに変わっていかれたのかということを理解していく必要があると思います。

もう1つが、「空間的な広がり」（スライド20）というところです。ここでもう1つ事例をご紹介したしますと、私たちが出会った方で、30代前半の男性がいらっしゃいます。中程度の知的障害と自閉症のある青年でした。この方は、どういうふうに登場したかというと、ご両親と3人暮らしでしたが、お母さんが病気で亡くなられて。お父さんと2人暮らしをしていたところ、そのお父さんも突然倒れてあっけなく亡くなられてしまった。その直後に、お嫁に行かれたお姉さんが「自分は弟を引き取ることはできない。弟の面倒を見てくれるところを探したい」ということで市役所に行かれた。

その市役所では、「今すぐ入れる入所施設は隣の県に1つあります」とご紹介された。お姉さんは「そういうものか」と思われたそうですが、それでも何となく釈然としないものを感じていて、お母さんの遺品を整理していたら親の会の会員名簿が出てきたそうです。知的障害者の家族会ですね。「お母さんはこういうところとつながっていたのか」と思い、そこに出ていた相談員さんの名簿のところに電話をかけてきて、その相談員さんから「がじゅまるの方で何とか関われないか」という要請をいただいて、この方と出会うということになりました。

いろいろお話を聞くと、実は小さいときから何となくみんなから気にされていた存在だったと。この方、言葉といえばおうむ返しになってしまうぐらいの方なんですけれども、ずっと通常クラスで、小学校、中学校と学ばれました。その後、特別支援学校の高等部に行かれて、進路の先生は作業所の利用を進められたそうです。お母さんはそれを拒んで裂き織りをやらせて、その裂き織りの作品でご本人が何とか生活ができていけないかということを、お母さんなりに考えて動かれていたのですが、なかなかうまくいかず、結局、卒業して15年ぐらい経ちますが、ここ10年ぐらいはお父さん、お母さんと出かける以外はどこにも出かけない生活を送っていらっしゃったということでした。

長く市内で生活をしていて、これぐらいの年代だったらたぶん現役の学校の先生でご存知の方がいらっしゃるんじゃないかなと思って、お姉さんの許可を得て親の会を通じて「この人のことを知らないか」という情報を流していただいたんです。そうしたら、ちょうど市内のある作業所で働くスタッフが「私の同級生に違いない」と私たちに知らせをしてくださった。「私の同級生の○○君だとしたら、イマイ先生（仮名）がきっとよく知っているはずだ」と。「イマイ先生はずっとお母さんの相談に乗ってきたはずだ」という連絡を入れてくださったんですね。

イマイ先生は私たちがよく生徒指導でお世話にな

る先生だったものですから、先生に早速連絡を取ったところ、お父さんが亡くなられたということに大変驚いて、「お葬式に間に合うものなら行きたい」とおっしゃったので、連絡を取り合ってお葬式に行っていただいたんですね。お焼香を上げに行っていただいた。そうしたら10年ぶりぐらいでご本人に再会することになって、イマイ先生に出会ったご本人は大喜びをされたんだそうです。

その喜んだご本人の顔を見て、お姉さんが「こんなふうに笑う本人のことは初めて見ました」と。「何とかイマイ先生とつながりのあるこの地域の中で、弟の暮らしを続けていくことができないだろうか」とお姉さんが言ってくださったんですね。こういうふうにお姉さんが言ってくださったら、私たちにとっては、しめたものです。いろいろ社会資源なども作らなければならなかったんですけれども、この方はグループホームで生活をして、日中作業所のようなところに通って、時々実家に帰る、時々先生にも会いにいくというような生活を、2年ぐらいかけて送ることができるようになっているという状況があります。

ですから、「どういう関係性の中でご本人が生きていらっしゃったのか」、それから「今どんな関係の広がりがあるのか、ないのか」というところも、理解する上での大事なポイントになってくるのかなと思っています。そのときに時間軸や空間軸を、例えば関係者をたどるというようなことで追っ掛けていって、物語や情報が拾えればいいのですが、実はそうじゃなくて私たちとの付き合いの中でそれを見つけていく、拾い上げていくということも、実際上は必要になってくるということもございます。

この「理解をする」、「受けとめる」ということを私なりに整理してみましたが、「支援者自身の価値観を排す」というのは無理に決まっているんですが、それが無理だとしても「自分がどういう価値観の中でこの仕事をしているのか」ということを、何とかかんとか分かろうとする中でその人の理解が進むんじゃないのかなと思うのです。そういう意味では私自身がその人とかかわってどう思ったということもとても重要になりますけれども、それはあくまでも「私の価値」の中でとらえている範囲なので、例えば『がじゅまる』のセンターには20代のスタッフもいれば、30代のスタッフもいれば、50代のスタッフもおります。パートナーがいる人間もいない人間もいるし、子育ての経験がある人間もない人間もいます。それからひとり親の家庭で育ったスタッフもいれば、大家族で育った人間もいます。

価値観にとらわれずに全員で受けとめる

そういう「いろいろな人間」が集まって、自分たちの感じたこと、考えたことを「ぶつけ合う」中で、それを全体化して何となくその方の「全体像」が見えてくるんじゃないのかなと感じています。そういう意味では私たち自身が「言語」にしていく、昨日の講義の言葉を拝借して言えば、「身振り」で付き合った上で、それを「言語」にしていくという、そういうことが、ご本人を「理解をする」、「受けとめていこうとする」という中で非常に重要なプロセスになっているような気がいたします。

スライドとしては先になってしまうのですけれども、お手元の資料でいうと19ページですね。その「身振り」ということ、どういうことをやっているかというとこんなことです。言ってみれば何でもやります。例えば、飛び込んできたご相談でいうと、付き合うきっかけとして不倫の仲裁に入るみたいなことからやらざるを得なかったことも中にはありました。こういう具体的な生活支援をしていく中で、ご本人の生きている「空間世界」とか「時間軸」の中のちょっとした部分に私たちもかかわらせていただく。

その中で、例えばお買い物をするときに常に1,000円札で、小銭はじゃらじゃらとポケットの中に入れている、そういう買い物をする方もいます。またある方はお金の使い方を勉強していく必要があるから、「まずはレシートをためることからやりましょう」ということになって、レシートをためていただいたんですね。この方は60代後半の男性、路上生活も経験をした男性だったんですけれど、同じ日にちのだいたい同じ時間帯の、同じスーパーのレシートが7枚も8枚もあるんですね。どういうことかなと思ったら、要するに計算ができない。それはだいたい分かっていましたが、それはその方なりの

「工夫」で、例えば１つのものを買ってお釣りがある。だから「まだ買える」と思ってもう１個買う。それでまたお釣りがもらえる。「まだ買える」と思ってという繰り返しで、それで買い物をしていたんです。

その方の最大の長所というのは、結構午前中の 10 時、11 時でタイムサービスみたいな時間帯に行くんですね。ですからご近所の主婦でわりとごった返している時間帯で、レジもちょっと並んだりするんですけれども、そんな中で何回も何回もレジを通るわけですが、嫌がらずに受け入れられている。そんなに大きなスーパーじゃないんです。お店の人たちと嫌がらずに付き合ってもらえる関係をつくる力が、その方にはあるということが、私たちに分かるということですね。そんな分かり方です。

冒頭で申し上げましたように何でも相談を受けるといったって、そんなことできるわけがないんです。ですけれども、ちょっとでもかかわるということで「一緒に考えたり、動いたり、悩む。」そういう「存在」をそばに感じていただく、それぐらいの効果はあるのかなと思います。それから、すぐにでも問題解決できそうなことを見つけて「一緒に喜ぶ」というようなこともありますし、見つけなくても自然に見つかったり自然にできていったり、そんなことが結構ある。「できましたね」ということを「言語化」するというだけで、ご本人の自信も深まります。

どこへ行ってもすぐけんかしちゃう方がいらっしゃるんですけれども、いわば「キレる」沸点がどこにあるかということが、「脇にいると」非常によく分かる。そのときにその沸点に行っちゃって、そこで席を立って終わりになっちゃうんじゃなくて、「まあまあ」という形で入ったり、「沸点になるな」と思う前に遮ったりすることも中にはありますけれども、そんな「コミュニケーションの仲介役」をすることで、例えば役所のワーカーさんには、その人に分かるように伝えていただくやり方をその場で見ていただいて、次からは私たちがいなくてもご本人たち同士でやりとりが成立するようになるとか、「こうやって質問すれば答えてもらえるんだな」ということをご本人に見て取っていただくとか、OJT という言葉がありますが、言ってみれば OLT（On the Life Training）、そんなようなことがやれるのかなということも感じています。

今そのような状況の中で、新規でお受けする相談件数は、右肩上がりの状況なんです。構造的にはどの分野のご相談でも共通している状況があるというときに、私たちは「個の関係」をベースにした支援の実践をしてきているわけです。しかしそれだけではやっぱり限界がある。もちろん「場につなぐ」とか「場の中に一緒に入ってみる」ということもやってきているわけですが、「場を立ち上げていく」というようなことを今後はやっていかなければならないとも思っています。

個人から地域へつなぐ これからの可能性

最後にもう１つ事例を紹介したいと思います。私たちの地域にはホームレス支援に取り組む「市川ガンバの会」という NPO があって、行政からも委託を受けて路上の訪問活動からアパートに入った後の生活の支援などの活動をされています。そこにサロンがあって、ここは互助会で運営されています。「市川ガンバの会」とはもう「がじゅまる」がスタートして以降、かなり濃密な連携関係にあるんですけれども、どういう連携かというと、ホームレス支援団体が取り組んできたノウハウの中で、声かけをして、関係をつくって、アパートでの生活の再建を立ち上げていく、始めていくということを続けていって。もう今 200 人を超える方々が居宅の生活を送っていらっしゃるわけですけれども、ホームレス支援のノウハウでかかわれる人たちは、もうだいぶかかわりができてきたと。今路上に残っているのはそのノウハウでなかなかやりとり、かかわりが成立しない方々、障害とか病気が疑われる方々。その人たちのかかわりを「一緒にやってほしい」というようなことで、私たちも付き合いをしているわけです。カっちゃんと呼ばれている 50 歳ちょっとの、男性がいます。その方がシェルターに入った当日に、２階の物干しで洗濯物を干そうとして転げ落ちて骨折をして、病院に搬送されて入院をしたと。入院したものの１時間に数十回ナースコールを押して、看護師さんたちが悲鳴を上げていて。「もう骨が付いたら、あとは大丈夫ですから早く退院してください」と言われた方がいるということで、一緒にかかわってほし

いということで、この方とのかかわりが始まりました。

知的障害が疑われるかなと思ったんですけど、この方１人では路上生活をしてないんですね。必ず誰かと一緒に路上生活をしたり、飯場では手元仕事もなかなか難しかったので調理の補助をしてずっと生きてきたそうです。地方の出身でイントネーションが独特で、私は話を聞いていて半分ぐらいしか聞き取れない感じなんですけど、背は私より小さいぐらいで、愛嬌（あいきょう）があってという感じの方でした。今じゃ愛嬌（あいきょう）があって人気者なんですけど、この方、とにかくじっとしていないんですね。「ガンバ」のそのサロンだけじゃなくて事務室の方まで入ってくるものですから、「ガンバ」の職員たちもうんざりしちゃって、「どうにかこの人の日中の場を探してください」というところから始まりました。

「ガンバ」の人たちといろいろ話をしていたら、スタッフの１人が「でも、いろいろ手伝ってくれてありがたいんだ」という話になって、「じゃあ、ボランティアをしていただいたらどうですかね」ということになって。気を利かせてボランティアという名札を付けて、カっちゃんに「ボランティアとしてお願いをします」と言っていただいたんですね。机の上をふいたりごみ出しをしたりということなのですが、その時点からカっちゃんが「迷惑者」から「人気者」に転換したんです。「人気者」になったことで、それでそこのサロンの中で「役割を持つ」ようになったと。

20 代の女性でマサ子さんという方がいます。この方も路上からてんかんを起こして、病院に搬送されて、それで「ガンバ」につながって今アパート生活をしている方なんです。このマサ子さんという方も似たような感じなんですね。それでカっちゃんの例があったものですから、「ガンバ」のスタッフはマサ子さんにも「ボランティアをお願いします」と言ったんです。

そうしたらそのボランティアの座をめぐって、カっちゃんとマサ子さんが取っ組み合いのけんかを始めちゃった。50 代の男性と 20 代の女性ですよ。同じぐらいの背の高さなんですけれども。そこでガンバの会の職員が仲裁に入って、「カっちゃんにやってもらうのは机の上をふくこと、マサ子さんにやってもらうのは雑巾を絞ってかけてもらうこと」と役割を割りふって、位置関係を整理するというようなことをやったわけです。

「場ができる」ことで、そこでまたいろいろなドラマが生まれる。そういう中で彼ら、彼女らが当事者相互の関わりのなかで「役割を持ちながら変わっていく」。そういう状況を私たちもそこで経験をすることができました。ですから、私たちがやってきたことを、これから「グループ」とか「場」を通じてどのように展開していくかということを今後考えていきたい、私たち自身もそういうノウハウなどを身に付けていきたいなと思っているところです。

おそらくその先、もちろん今でも地域づくりの取り組みはやっていますけれども、私たちが暮らす地域社会の中でそういう展開をもっともっとドラスティックに考えていく必要があるだろうと。そのためには「私たち自身」が「どういうふうに他者とつながっていくか」ということを、とらえ直したり見つめ直したりしていく必要があるのではないかと思っております。私からの問題提起は以上とさせていただきます。ご清聴ありがとうございます。（拍手）